

# スティグマを負わされたアイデンティティと〈回復〉の希求

## ——「家族の犯罪」をめぐる経験の組織化——

筑波大学 高橋康史

### 1 目的

本報告の目的は、犯罪者を家族にもつ人びとの自己の語りを分析し、アイデンティティの回復に関する考察を試みることである。従来、スティグマは、社会側の基準をもとにした概念であるために、社会規範を前提に個人がどのような規範を選択するのかという状況定義の一部として自己を捉えてきた(坂本 2005)したがって、スティグマを負わされたアイデンティティへの主たる対処方法は、パッシングやカバリングを用いて社会規範に適応しようとする常人化、自らを逸脱者として定義する社会規範それ自体に抗議を申し立てるアイデンティティ・ポリティクス<sup>2</sup>の2つが採択されてきた。さらに近年、自己物語論研究の発展から、差別や病いの問題経験に対して、当事者自身の意味づけによる〈回復〉が、新たな視角として登場した。一方で、これまでの研究においては〈回復〉の限界も指摘されている。たとえば、支援の現場において目標とされている理念としての〈回復〉は、当事者に〈回復〉を駆りたて、プレッシャーを与えることにもつながりうる(石川 2007)。そこで、本報告では、〈回復〉を求めること(以下、〈回復〉の希求)が、スティグマを負わされたアイデンティティにいかにして作用していくのかを捉える。

### 2 方法

本報告では、スティグマの二重拘束性が強く見られる犯罪者を家族にもつ人びと(以下、家族ら)の語りを分析の対象とし、質的な研究を試みる。具体的には、家族らに対するインタビュー調査を、Goffman (1974) の『Flame analysis』を用いて分析を試みることによって、彼/彼女らのスティグマを負わされたアイデンティティの〈回復〉に関する経験の組織化を行う。分析では、スティグマの回復という primary framework (第一次枠組み) が、どのように keying (転調) していくのかを描き出すことを試みる。

### 3 結果・結論

家族らに対するインタビュー調査においては、スティグマの解消を志向する語りを通じて「〈回復〉のフレーム」が確認された。そして、「〈回復〉のフレーム」は、「〈回復〉の希求のフレーム」へと転調していった。その転調においては、〈回復〉を求めることが、スティグマを負わされたアイデンティティにおける「〈普通〉であるならば〈異常〉な自己を認めよ」(田中 2004) という命題に突き当たり、かえってスティグマに囚われていくという過程が確認された。以上から、スティグマを負わされたアイデンティティにおいて〈回復〉の希求は、ある種のアノミー状態を生み出す可能性があると考えられる。報告当日は、〈回復〉の希求について社会学的な考察を試みる。

### 文献

Goffman, Erving, 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harper & Low.

石川良子, 2007, 『ひきこもりの〈ゴール〉——「就労」でもなく「対人関係」でもなく』青弓社。

坂本佳鶴恵, 2005, 『アイデンティティの権力——差別を語る主体は存在するのか』新曜社。

田中理絵, 2004, 『家族崩壊と子どものスティグマ—家庭崩壊後の子どもの社会化研究』九州大学出版会。